

問題冊子および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないこと。

2 受験番号と氏名は、解答用紙1ページの所定の欄に記入すること。

問題は1～6ページである。左下隅にページが表示してある。

問題一は、共通問題である。解答用紙の最初に、入学後に専攻する専門分野の選択肢が掲出してあるので、該当するものを○で囲むこと。

問題二は、共通問題である。三つの問いに解答していない場合、全体の得点はゼロとなる。

問題三は、選択問題である。日本語学、古典文学、近現代文学の三領域の中から、入学後に専攻する領域の問題を選択し、設問の指示に従って解答すること。

- | | | |
|----------------------------|-----------------------|------------------|
| Ⅲ | Ⅱ | Ⅰ |
| 近現代文学領域 | 古典文学領域 | 日本語学領域 |
| 4
5
6
へ
ー
ジ | 2
3
へ
ー
ジ | 1
へ
ー
ジ |

4 解答用紙は四枚表裏。1〜8ページである。問題との対応は次の通り。

問題一	問題二	問題三
1へージ	1へー2へージ	3へー4へージ
		3へー4へージ
		5へー8へージ
	III	II
		I
		日本語学領域
		古典文学領域
		近現代文学領域

解答はすべて解答用紙の所定のページに記入すること。

設問の指示に従い、問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

【修士課程】

専門科目

日本語日本文学コース

※解答は別紙(縦・横書)

問題一 〔共通問題〕

大学院修士課程においてあなたが研究しようとしているテーマや対象について、自らの構想している研究方法に触れながら、十行程度で、できるだけ具体的かつ簡潔に説明せよ。

問題二 〔共通問題〕

- ・ 次のABC群各々三問の中から、それぞれ一問ずつを選択し、各問十行程度で解答せよ。
- ・ 一般外国語で「日本語」を受験する者は、ABCのいずれか一つの群の代わりとしてG群の間を選択できる。
- ・ 解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号(A1など)を明記せよ。
- ・ 三つの群の問題の中、一つの群の問題でも無回答の場合、問題二全体の得点は零となる。

【A群】 日本語学領域

- A1 古語から現代語へ至る、動詞の活用形式(活用の種類)の変化について説明せよ。
- A2 日本語の音韻と外来語の関係について説明せよ。
- A3 日本漢字音の種類について説明せよ。

【B群】 古典文学領域

- B1 日本古典文学作品における文献学的問題について、具体例を挙げて述べよ。
- B2 日本古典文学と「病」について、具体例を挙げて述べよ。
- B3 日本古典文学の外国語への翻訳者について、具体的に人名を挙げて、その翻訳の特色などを述べよ。

【C群】 近現代文学領域

- C1 近現代文学と学校教育(教科書)との関わりを、具体的な例を挙げて説明せよ。
- C2 近現代文学において文学賞の果たした役割を、具体的な例を挙げて説明せよ。
- C3 近現代文学と美術との関わりを、具体的な例を挙げて説明せよ。

【G群】 一般外国語で「日本語」を受験する者のみ、右のABC群の中の一つの群の代わりとして選択できる問題。

- G1 あなたの研究する「日本語学」または「日本文学」という学問分野について、代表的な論文・研究書または研究者名を具体的に挙げて説明せよ。

問題三 〔選択問題〕 I II IIIから一領域を選択解答せよ。

I 日本語学領域

- 1 各自の関心がある研究領域において、資料(データ)を取り扱う上で留意すべきことがらを具体的に述べよ。
- 2 次のA～Fから三題を選び、解答せよ。解答の冒頭にその記号を明記すること。
 - A 宣命体について知るところを述べよ。
 - B 日本語における女性語(女言葉)について知るところを述べよ。
 - C 日本語史における漢語のありかた(生成あるいは受容)について知るところを述べよ。
 - D 上代日本語の音韻体系について知るところを述べよ。
 - E 「とりたて」について知るところを述べよ。
 - F 「はい」「ええ」の違いについて知るところを述べよ。

II 古典文学領域

(一) 次に掲げる語群いゝうの中から二つを選び、それぞれについて要領よく説明せよ。
(一題につき五行程度)。解答の冒頭には、選んだ記号とその語とを明記すること。

い	額田王	ろ	『万葉集』巻五	は	倭健命	に	出雲国造神賀詞
ほ	清原俊蔭	へ	武田宗俊	と	物語二百番歌合	ち	夜の寝覚
り	古今和歌集仮名序	ぬ	源俊頼	る	京極派の和歌	を	冷泉家
わ	保元物語	か	古今著聞集	よ	秋夜長物語	た	本地物
れ	東海道中膝栗毛	そ	俳諧歳時記葉草	つ	都賀庭鐘	ね	与謝蕪村
な	文選	ら	経国集	む	句題和歌	う	源為憲

(二) 次のA～Iの中から一題を選び、論述せよ(二十行程度)。

- A 万葉集の雑歌
- B 古事記の日向神話
- C 勅撰集・私撰集・私家集の共通点と相違点
- D 女房日記と日記文学
- E 古今和歌集の注釈史と古今伝授
- F 読み本系『平家物語』について
- G 本居宣長の「もののあはれ」について
- H 上田秋成の読本について
- I 本朝文粹について

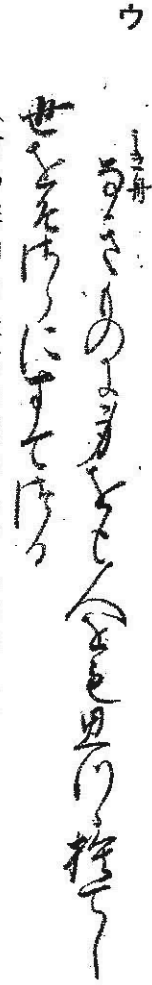
(三) 次のア～キの中から一つ選び、本文の直後の(一)内の指示にしたがって解答せよ。

ア 小竹之葉者三山毛清爾乱友吾者妹思別来礼婆

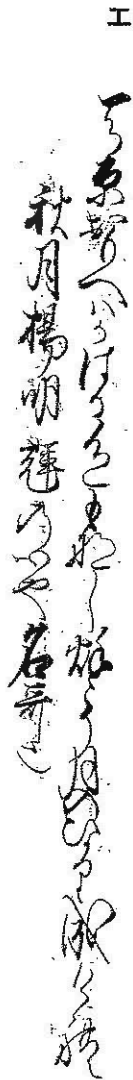
(右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。)

イ 鼠来云内者富良々々外者湏々夫々

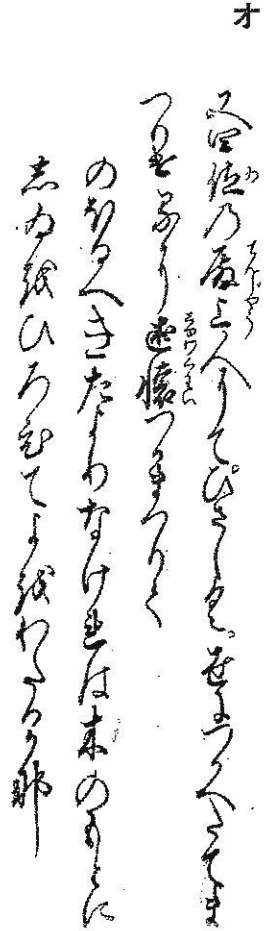
(右をすべて平仮名で書き下し、どのような場面における記述か説明せよ。)

ウ 

(右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。)

エ 

(右の影印の全文を翻字し、和歌を現代語訳せよ。和歌の下句頭は偏旁左右逆となった「秋」字。)

オ 

(右の影印の全文を句読点も含め翻字し、現代語訳せよ。)

カ

佐嘉珮川草場先生詩名籍甚此間 書肆請其鈔本四冊將以刻之属序於予 或曰先生自以詩代年譜蹄曰詩齋今 題予萬首而僅刻四冊母乃歎於人望 衆

(右の漢文を適宜句読点を施して、書き下し文に直せ。その後に現代語訳を添えよ。)

キ 東觀漢記百世三卷

趙充武託靈帝長
水校尉劉珍等撰

右諸書經籍志所載載也而伴漢記古倫大臣所將來也

(右の影印の全文を翻字し、その内容を説明せよ。)

Ⅲ 近現代文学領域

(一) 次のA1、2、B1、2は、日本の近現代文学の代表的な作品の一節である。これら四つについて、①用語・文
体・語りの方法など表現上の特色、②その作品の文学性や文学史的意味・文学者の生涯における位置、の両面から、自
由に論ぜよ。

A1 樋口一葉「にぎりえ」

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込上る涙を吞込んで、これは私が惡う御座んした、堪忍をして下され、お力が親切で志して呉れたものを捨て仕舞つたは重々惡う御座いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御座んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきて此後とやかく言ひませぬ、陰の噂しますまい故離縁だけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てゝ來た者なれば、離縁されての行き處とはありませぬ、何うぞ堪忍して置いて下され、私は憎かるうと此子に免じて置いて下され、謝りますとて手を突いて泣けども、イヤ何うしても置かれぬとて其後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ體、これほど邪慳の人ではなかりしと女房あきれて、女に魂を奪はるれば是れほどまでも淺ましくなる物か、女房が歎きは更なり、遂ひには可愛き子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなしと覺悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父さんの傍と母さんと何處が好い、言ふて見ると言はれて、我らはお父さんは嫌い、何にも買つて呉れない物と眞正直をいふに、そんなら母さんの行く處へ何處へも一處に行く氣かへ、あゝ行くともとて何とも思はぬ様子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする男の子なればお前も欲しからうけれど此子はお前の手には置かれぬ、何處までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひますといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何處へでも連れて行け、家も道具も何も入らぬ、何うなりともしろとて探轉びしまゝ振向んとせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいまゝの道樂なり何なりお盡しなされ、最ういくら此子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探ぐつて何やらの小風呂敷取出し、これは此子の襟間着の袷、はらがけと三尺だけ貰つて行まする、御酒の上といふでもなければ、醒めての思案もありますまいけれど、よく考へて見て下され、たとへ何のやうな貧苦の中でも二人双つて育てる子は長者の喜しいひまする、別れば片親、何につけても不憫なは此子とお思ひなさらぬか、あゝ腸が腐人の子の可愛さも分りはすまい、もうお別れ申ますと風呂敷さげて表へ出れば早くゆけくとして呼かへしては呉れざりし。

八

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃、新開の町を出し棺二つあり、一つは駕にて一つはさし擔ぎにて、駕は菊の井の隠居處よりしのびやかに出ぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、彼の子もとんだ運のわるい話らぬ奴に見込れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくたと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをして居たといふ確かな證人もござります、女も逆上て居た男の事なれば義理にせまつて遣つたので御坐るといふもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯屋の歸りに男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事ならず、一處に歩いて話してはしても居たらうなれど、切られたは後袈裟、嬪先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な切腹、蒲團やの時代から左のみの男と思はなんだがあれこそは死花、あらさうに見えたといふ、何にしろ菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては残念であらうと人の愁ひを串談に思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なれど、恨は長し人魂か何かしら筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べるを見し者ありと傳へぬ。

A2 志賀直哉「城の崎にて」

段々と薄暗くなつて來た。いつまで待つても、先の角はあつた。もうここで引きかへさうと思つた。自分は何氣なく傍の流れを見た。向う側の斜めに水から出てゐる半疊敷程の石に黒い小さいものがあつた。蝶だ。未だ濡れてゐて、それはいい色をしてゐた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、凝然としてゐた。體から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸程流れてゐる。自分はそれを何氣なく、蹠んで見てゐた。自分は先程蝶を嫌ひでなくなつた。蜥蜴は多少好きだ。屋守は蟲の中でも最も嫌ひだ。蝶は好きでも嫌ひでもない。十年程前によく蘆の湖で蝶が宿屋の流し水の出る所に集つてゐるのを見て、自分が蝶だつたら堪らないといふ氣をよく起した。蝶に若し生れ變つたら自分はどうするだらう、そんな事を考へた。其頃蝶を見るとき自分が想ひ浮ぶので、蝶を見る事を嫌つた。然しもうそんな事を考へなくなつてゐた。自分は蝶を驚かして水へ入れようと思つた。不器用からだを振りながら歩く形が想はれた。自分は蹠んだまま、傍の小竈程の石を取上げ、それを投げてやつた。自分は別に蝶を狙はなかつた。狙つても逆も當らない程、狙つて投げる事の手前自分はそれが當る事などは全く考へなかつた。石はこつといつてから流れに落ちた。石の音と同時に蝶は四寸程横へ跳んだやうに見えた。蝶は尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思つて見てゐた。最初石が當つたとは思はなかつた。蝶の反らした尾が自然に靜かに下りて來た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて、前へついてゐた兩の前足の指が内へまくれ込むと、蝶は力なく前へめつて了つた。尾は全く石についた。もう動かない。蝶は死んで了つた。自分は飛んだ事をしなと思つた。蟲を殺す事をよくする自分であるが、其氣が全くないのに殺して了つたのは自分に妙な嫌な氣をさした。素より自分の仕た事ではあつたが如何にも偶然だつた。蝶にとつては全く不意な死であつた。自分は暫く其處に蹠んでゐた。蝶と自分だけになつたやうな心持がして蝶の身に自分がなつて其心持を感じた。可哀想に想ふと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかつた。蝶は偶然に死んだ。自分は淋しい氣持になつて、漸く足元の見える路を温泉宿の方に歸つて來た。遠く町端れの灯が見え出した。死んだ蝶はどうなつたか。其後の雨でもう土の下に入つて了つたらう。あの鼠はどうしたらう。海へ流されて、今頃は其水ぶくれのした體を應芥と一緒に海岸へでも打ちあげられてゐる事だらう。そして死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる。さう思つた。自分はそれに對し、感謝しなければ濟まぬやうな氣もした。然し實際喜びの感じは湧き上つては來なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に差はないやうな氣がした。もうかなり暗かつた。視覚は遠い灯を感じるだけだつた。足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確だつた。只頭だけが勝手に働く。それが一層さういふ氣分に自分を誘つて行つた。

三週間あて、自分は此處を去つた。それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かつた。

【修士課程】

専門科目

日本語日本文学

コース

※解答は別紙（縦書）

B1 川端康成「伊豆の踊子」

B2 石牟礼道子「苦海浄土」

第一章 椿の海

雲がぬれの渚小舟
生死の苦海果もなし

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等學校の制服をかぶり、紺色の着物を袴をはき、學生カバンを肩にかけてゐた。一人伊豆の旅に出る四日目のことだつた。修善寺温泉に一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして村瀬の高下駄で天城を登つて来たのだつた。重なり合つた山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでゐるのだつた。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲つた急な坂道を駆け登つた。やうやく峠の北口の茶屋に辿りついてはつとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまつた。餘りに期待がみごとに的中したからである。そこに旅藝人の一行が休んでゐたのだ。

突つ立つてゐる私を見た踊子が直ぐに自分の座蒲團を外して、裏返しに横へ置いた。

「ええ……」とだけ言つて、私はその上に腰を下した。坂道を走つた息切れと驚きとで、「ありがたう。」といふ言葉が咽にひつかかつて出なかつたのだ。

踊子と眞近に向ひ合つたので、私はあわてて袂から煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やつぱり私は黙つてゐた。

踊子は十七くらのに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結つてゐた。それが卵形の凛々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和してゐた。髪を豊かに誇張して描いた、神史的な娘の繪姿のやうな感じだつた。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がゐた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見てゐるのだつた。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出會つた。その時は若い女が三人だつたが、踊子は太鼓を提げてゐた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思つた。それから、湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄關の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見てゐた。

あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだらう。天城七里の山道できつと通ひつづけるのだらう。さう空想して道を急いで来たのだつたが、雨宿りの茶屋でびつたり落ち合つたものだから、私はどきどきしてしまつたのだ。

間もなく、茶店の婆さんが私を別の部屋へ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子がなかつた。下を覗くと美しい谷が目の届かない程深かつた。私は肌を粟粒を拵へ、かちかちと歯を鳴らして身顫ひした。茶を入れた來た婆さんに、寒いと言ふと、「おや、旦那様お濡れになつてゐるぢやございませんか。こちらで暫くお休みなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし」と、手を取るやうにして、自分たちの居間へ誘つてくれた。

その部屋は煙が切つてあつて、障子を明けると強い火氣が流れて来た。私は裏居障に立つて躊躇した。水死人のやうに全身蒼くくれの爺さんが煙端にあぐらをかいてゐるのだ。煙まで黄色く腐つたやうな眼を物憂げに私の方へ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれてゐると言つてもよかつた。到底生物と思へない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになつてゐた。

「こんなお恥かしい姿をお見せいたしました……でも、うちのぢいでございますから御心配なさいませう。お見苦しくても、動けないのでございませうから、このままで堪忍してやつて下さいまし。」

さう斯うつてから、婆さんが話したところによると、爺さんは長年中風を患つて、全身が不随になつてしまつてゐるのださうだ。紙の山は、諸國から中風の養生を教へて來た手紙や、諸國から取り寄せた中風の藥の袋なのである。爺さんは峠を越える旅人から聞いた、新聞の廣告を見たりすると、その一つをも渡らさずに、全國から中風の療法を聞き、買集めたのださうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めながら暮して來たのださうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古の山を築いたのださうだ。

私は婆さんに答へる言葉もなく、圍爐裏の上にうつむいてゐた。山を越える自動車の家を揺すぶつた。秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、なぜこの爺さんは下りないのだらうと考へてゐた。私の着物から湯氣が立つて、頭が痛む程火が強かつた。婆さんは店に出て旅藝人の女と話してゐた。

「さうかねえ。この前連れてゐた子がもうこんなになつたのかい。いい娘になつて、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗になつたのかねえ。女の子は早いもんだよ。」

山中九平少年
年に一度か二度、台風でもやつて來ぬがきり、波立つこともない小さな入江を覗んで、湯堂部落がある。

湯堂湾は、こぼれまゐるような波の上に、小さな舟や鵜飼などを浮かべていた。子どもたちは真つ裸で、舟から舟へ飛び移ったり、海の中にとんと落ちて込んでみたりして、遊ぶのだつた。

夏は、そんな子どもたちのあける声が、菰畑や、夾竹桃や、ぐるぐるの櫓をもつた大きな櫓の木や、石垣の間をのびつて、家々にきこえてくるのである。

村のいちばん低いところ、舟からあがればとつきの段丘の根に、古い、大きな共同井戸——洗場がある。四角い広々とした井戸の、石の壁面には苔の蔭に小さなナメコや、赤く可愛らしいカニが遊んでゐた。このようなカニの棲む井戸は、やわらかな味の岩清水が湧くにちがひなかつた。

ここあたりは、海の底にも、果が湧くのである。今は使わない水の底に、井戸のゴリが、椿の花や、舟釘の形をして果々と沈んでゐた。

井戸の上の崖から、樹齢も定かならぬ椿の古樹が、うち重なりながら、洗場や、その前の広場をおおつていた。黒々とした葉や、まがりくねつてのびている枝は、その根に割れた岩を握り、年老いた精をはなつていて、その下蔭はいつも涼しく、ひっそりとしていた。井戸も椿もおのれの歳月のみならず、この村のよさを語つてゐた。

湯堂部落の入江の近くに、薩摩境、肥後藩の陸口番所、水口番所があつたはずであつた。入江の外は不知火海であり、漁師たちは、

「よんべは、御所ノ浦泊まりで、朝のベタ風の間、ひとはしりで戻つて來つた。」

御所ノ浦は、目の前にある天草である。その天草にむいて体の向きを左にすると、陸路も海路も薩摩と交わりあつてしまふのである。

入江の向こう側が薩摩部落、薩摩のはしつこに、洗灌川のような灌漑が流れ、これが県境、「神の川」であり、河原の石に乗つて米のとぎを流せば、越境してしまう水のそとら側の家では、かつきりと鹿児島弁を使うのだつた。

薩摩を越えて鹿児島県出水市木ノ浦、そして熊本県御所ノ浦、國道二号線沿いに薩摩、湯堂、洗場、出水、月ノ浦と来て、水俣市多発地帯がながり、百間の港に入る。百間から水俣の市街に入り、百間港に、新日窒水俣工場の工場排水口がある。

井戸のある平にそつて、板壁、板の間の公民館——青年俱樂部が、朽ちかけて建つてゐた。潮風の冷んだこの小屋は、いつもがらんとした、久しく若者たちが使わなかつたので、年寄りがひびひと感ぜつづけてゐた寂しさがこの建物に染められ、吹きぬけてゐるやうだつた。青年たちが長く寄りつかない青年俱樂部は、村の生氣をいちじるしく欠いてしまふのである。

若者たちが、村に、つまり漁師として、居つてゐなかつたのは、もうずいぶん前からこのやうである。ことに、水俣病がはじまつてからは、元にもとらない。どんなに熱い漁師でも、それを親から子へと伝授することはもうできないのだつた。

年とつた漁師たちは、むつたりとそのことを想つてゐた。彼らはひとりひとり、自分こそ鯛釣りの名人だとおもひ、針突きの名人だとおもひ、ボラ獲の仕かけに達意してゐるおもつてゐた。そのひとりひとりには、おのれの言葉とおのれ、他にありやうもない名人にちがひなかつた。彼らのプライドは、暮らしを支え、魚市場を支え、水俣市民の蛋白質を支え、不知火海沿岸漁業の一角を支えてゐたのだ。

二〇二二年度

早稲田大学大学院文学研究科

入学試験問題

【修士課程】

専門科目

日本語日本文学コース

※解答は別紙(縦・横書)

(二) 次の中から四題を選び、論評せよ(選んだ番号を、指定欄に記すこと)。

- 1 文学作品における明治時代と貧困とのかかわりを、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 2 近現代文学におけるメディア検閲研究の重要性を、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 3 アメリカ文学と近現代文学とのかかわりを、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 4 近現代文学とパンデミックはどのように関連するのか、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 5 大正時代・昭和時代前期における文学論争として特筆されるものを、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 6 いわゆる「無頼派」の作家たちの文学の特色を、複数の作家と作品に言及しながら論評せよ。
- 7 近現代文学研究におけるジェンダースタディーズの意義について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 8 近現代文学研究における国際化の意義について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 9 近現代文学研究における文学館の意義について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 10 近現代文学研究にかかわる近年の資料、または近年刊行された研究書のうち、あなたが重要と思うものを一つ(以上)とりあげ、なぜそう考えるか論評せよ。

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

日本語日本文学

総 点

--

ここから記入すること

問題一

入学後に専攻する専門領域を○で囲め。古典文学領域については、「」内の該当する時代等、
 ならびに散文・韻文にも○を付すこと。
 日本語学領域
 古典文学領域 「上代・中古・中世・近世・和漢比較文学」／散文・韻文
 近現代文学領域

問題二

解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（例 A1）を明記すること。

(裏へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次頁へ続く)

ここに記入すること

--

問題三

I 日本語学領域／II 古典文学領域

(選択した領域を○で囲め) ※問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

(裏へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

ここに記入すること

問題三

Ⅲ 近現代文学領域

(一) A 1

(一) A 2

(裏へ続く)

(一)
B
1

(一)
B
2

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

ここに記入すること

--

(1) ()

--

(1) ()

--

(裏へ続く)

(1) ()

(2) ()

—これより先の余白には絶対に記入しないこと—